

石川島記念病院 看護師 土田慶子

功 績 院内のガウン・エプロンが払底しそうになった時に、試作を重ねて、完成度の高い防護ガウン300枚を自主作成。院内各部署に配布すると共に、製作方法を伝えて、新型コロナに伴う物品不足を乗り越えることができた功績。

推 薦 者 医局 院長 重田洋平、院長補佐 池崎清信、内科部長 葛原信三

推 薦 理 由 医療従事者を感染から守ることができなければ、患者さんを守ることができず、医療は崩壊してしまう。院内から防護衣が払底してしまうという危機の中、努力と工夫で、完成度が高く製作も簡易な防護エプロンを各部署に広めてくれた功績は極めて大きく、理事長賞として推薦します。

内 容

土田は、非常勤の外来看護師。

長く急性期の看護師を務め、石川島記念病が休院迎えた時に、一度看護師をリタイアしたが、再開にあたって看護師の定員が埋まらず苦勞しているという相談を受けて、「この病院が好きなので、自分で役に立つのなら」と復職。以来、2名の看護師で外来を支えてくれている。基本は週3日の出勤であるが、忙しい時や頭数が足りないときは週に4～5日の出勤も厭わず、また、外来で手が空く時間帯があると、病棟に上がって患者さんの見守りも担当してくれる。

コロナ感染拡大に伴って医療物資の入荷が止まる中で、病棟看護やリハビリテーション科で、オムツ交換、陰洗、流涎や、耐性菌陽性患者さんの身体ケア、感染性ゴミの廃棄等で、日々大量に使用するディスプレイのエプロンが逼迫。あと数週間の在庫もないという中で、使用量を抑えるか、洗って再利用するか等、緊急対応に追われている状況を見て、土田は身近な素材で代用品を作り出せないかと考え、ゴミ用のポリ袋からエプロン制作にとりかかった。

最初は、ゴミ袋の底と横に穴をあけてそのまま被る簡単な筒形衣を試したが、丈が短すぎて脚が丸出しになることと、背中に熱がこもる点で機能性に問題があった。土田は、得意な裁縫の技術を活かして試作を重ね、45リットル袋の横を切って縦長の生地を作り、首穴の位置を工夫し、背中で結ぶ紐がついた型に辿り着いた。脚も市販品よりも防御でき、簡単に紐で縛って着脱が可能となった。コスト的にも、ガウン@200円、エプロンでも@6円程度に比べて、@2円と極めて低コストに収まった。

土田は、仕事の合間や休日に少しずつ作り貯めて、300枚の防護エプロンを、病棟看護・ケアワーカー、外来看護、リハビリテーション、検査、放射線等、院内の各部署に配り、作り方もブログに掲載して伝授した。各部署でも、夫々必要最低限のエプロンを確保して、医療・看護の質を落とすことなく、防護着のボトムを乗り越えることができた。

その後、国からの緊急支援が進んで、ガウンは8,000枚、ディスポのエプロンは常に1,000枚の在庫を確保できるようになったが、土田の考案したエプロンは、使いやすさと低コストから、外来で引き続き使用されている。